華子の夏、金鳥の夏

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
華子の夏、金鳥の夏

【Ｎコード】
Ｎ９２７８Ｍ

【作者名】
ごはんライス

【あらすじ】
こういう夏もええなーＢＢＱしたいなー。

華子の会社のビルの前まで、ローラースケートで行った。
「遅いなあ」
華子は会社は五時に終わるはずだ。五時過ぎてるのに出てこない。
会社から出てきた人に聞いてみると、最近みんな残業が多いからねえと言う。
煙草をスパスパ吸っていたら、ちびっこが群がってきた。
「わあ。光ゲンジだ。サインほしーなー」
「うるさい。オレはライス。ただの非正規労働者。向こう行きなさい。しっし」
しばらくして、華子が出てきた。
「げげっライス先生」
「やあ。華子」
オレは紙袋からローラースケートを取り出し、華子に差し出した。
「ええっこれ、あたしもはくの??」
「そりゃそうさ」
「恥ずかしい」
「バカヤロ。オレなんて岡崎からこれはいて来たんだぜ」
「わかったわよう」
華子もローラースケートをはいた。
オレは華子の手を取り、走り出した。
「イエーーーーイ」
「こわーーーーい」
風が気持ちいい。さわやか。
「華子。家にお母さんはいるかい」
「いるわよ」
「そいつはいい。今日はみんなで、フランス料理を食べに行こう」
「ええっすごい」

華子の家に到着した。
華子のお母さん、鼻江がホースで庭に水をやっていた。
「まあまあ。ライスさん。こんばんは」
「こんばんは。お母さん」
「お母さん！ライス先生がフランス料理に連れていってくれるって」
「ほんとかい。うれしい」
華子とお母さんは着替えた。オレは外で犬のトニーと相撲をとっていた。
猫のみゃーが、こいつら暑いのにようやるなあという顔をしている。
「さあ。行こうか。はい。お母さん」
オレは紙袋からローラースケートを取り出し、お母さんに差し出した。
「ええっあたしもはくのかい」
「そうだよ」
「恥ずかしい」
「むう親子だなあ」
てか、誰だって恥ずかしいよ！！
「お母さん。はかないとライス先生キレるからはいてあげて」
「わかったよ」
お母さんもローラースケートを装着。
みんなで手をつなぎ、飛ばした。
「いえーーーーい」
「きゃあああああ」
「わあああ。こわあああああ」
お母さんがこけそうになったので、オレはあわててお母さんを支え、そのまま持ち上げて走った。
フランス料理店に到着。
入り口に入ると支配人がいる。
「いらっしゃいませ」
「どうも」

「あの失礼ですが、お客様、非正規労働者でございますか？」
「ん。よくわかったね」
「だいたいわかります。非正規は身なりが悪くて大抵太ってますから。ファーストフードしか食べないから」
「ふうん。まあいいや」
オレが行こうとすると、支配人が止める。
「なんだよ！」
「申し訳ございませんが、非正規のお方はお断りしてるんです」
「なにい！」
華子とお母さんは通された。
「なんで！」
「社員とお年よりはいいのです」
「ちきしょー！」
華子が心配そうにこっちを見てる。
「ライス先生。お金ないよ」
「わかったよ！会計のとき携帯してよ。払うから！」
「わかった。ごめんね」
お母さんはすでにスキップまじりだ。
オレは店を出て近くの牛丼屋に入った。
「むしゃむしゃ。ちきしょう。なんだこの差は。むしゃむしゃ」
何時間か経ち、オレは携帯で呼ばれ、会計を済ました。
「ライスさん。ありがとうねえ。おいしかったよ」
「ほんと。景色もよかったし、最高だったねえ。お母さん」
「うん！」
オレはちょっといい気分。二人の笑顔が見れたので。
二人ともワインを飲んだので、ローラースケートはもうはけない。
オレもローラースケートを脱いで、三人で街を歩いた。
「だめだ。家遠すぎる」
「ローラースケートはこうか」
「だめだよ。飲酒してるから捕まるよ」

「タクシー代ないし」
オレはよしこうなったら最終手段だと思い、四次元ポケットから取り出した。
「ビッグライトーーー」
みんなにビッグライトをあてる。
すると、三人とも見る見るでかくなって、実に十メートルくらいになった。
街の人がびっくりしてる。
「うわあああ。おばけええええ」
「すげええ。なんじゃあああああ」
華子はおろおろしてる。
お母さんが面白がって通行人を踏み潰そうとしたので、華子が止めた。
「さあ。みんな行こう。この大きさならすぐに家に着くよ」
三人の巨人はどしどしどしと街を歩いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9278m/

華子の夏、金鳥の夏

2010年10月28日08時39分発行